

大阪音楽大学音楽博物館東洋楽器関係索引補遺

ー 漢字表記の楽器をどう扱うか

明 木 茂 夫

Index of Oriental Musical Instruments in the Collection of the Museum of the Osaka College of Music Arranged by Kanji Character

Shigeo Akegi

This is a supplemented index compiled for the Museum of the Osaka College of Music of musical instruments contained in its collection. The names of Oriental musical instruments are written in kanji characters. However, the way certain characters are pronounced differs from Japanese to Chinese and Korean. For this reason, when instrument names are indexed according to the alphabetized pronunciations of their names in each language, they can appear to be different items. In spite of this, they are actually the same instrument, because pronunciation of the same kanji character differs from one language to another. Therefore, a need exists for an index arranged by kanji characters instead of the Western alphabet. To meet these needs, I have compiled an index of Oriental musical instruments arranged in order of their kanji characters, not how their names are pronounced.

1、はじめに

本稿は、大阪音楽大学音楽博物館所蔵楽器の図録索引に補遺を行おうというものである。なぜそんな余計なことをせねばならないのか、ご不審の向きもあろうし、またいつも快く所蔵品を見せて下さっている同博物館に失礼があってもならない。そこでまず、私が一体ここで何をしようとしているのかについて、簡単に説明しておきたいと思う。

私は中国音楽を専門としているのだが、実は音楽学は全くの素人^{しろうと}で、専門的な訓練は何も受けていない。出身は中国文学、つまり漢文である。では何をどう研究しているのかと言うと、一言で言えば漢文の一分野としての中国音楽をやっているというわけである⁽¹⁾。儒教経典の中には「楽類」という分野があって、音律や楽理の本が古くから伝えられている。また歴代の正史には「音楽志」があって、当時の楽制を記録している。また本来文学のジャンルである「詞曲」（詞は一種の文人歌曲で西洋のリートに相当、曲は戯曲音楽で西洋のオペラに相当）にも古い時代の楽譜が残されており、また別に音楽面の創作理論も展開されている。こうした音楽資料は基本的に漢文の知識がないと読み解くことはできない。もちろんそこには西洋音楽の理論や知識も必要になることは言うまでもないが、ただその基本は中国学にあると考えてよい。もちろん数は多くはないが、このような中国学の分野における音楽学研究者というのは、日本にも中国にもちゃんと存在しているのである

⁽²⁾。

と、まあこういうわけで、私は東洋楽器の実物を拝見しに音楽博物館にお邪魔するようになった。もちろん西洋楽器も興味津々である。音楽的な興味だけではなく、楽器の機械仕掛けの部分というのは大変面白い。毎度時のたつのを忘れるほどに、博物館と言うところは楽しい場所である。そうこうしている内に、東洋の楽器を検索するための自分のメモがたまって来て、この機会にきちんとまとめて博物館の所蔵品目録の補遺として公開しようと思い立った、というのが拙稿の趣旨である。

2、ローマ字索引における東洋楽器の表記

ではまずお手元に『大阪音楽大学付属楽器博物館（＝現 音楽博物館）目録』があれば、その索引（INDEX）をご覧ください。例として、所蔵品の内の「琵琶」を調べてみよう。「B」の項目には「びわ＝ biwa」の掲載はないが、そのこと自体は問題ではない。単に「琵琶」という名称の楽器が所蔵されていないだけの話で、全体を探して行けば「筑前琵琶」「楽琵琶」「平家琵琶」「倭倭琵琶」「笹琵琶」「薩摩琵琶」という琵琶が所蔵されていることはすぐに分かる。

ところがよくよく見ると、別の項目に「琵琶」が掲載されている。「P」の項目の「PIPA（琵琶）」である。同じ琵琶でもこれは中国の琵琶だから、見出し語が現地読みで「PIPA」となっているのである。なるほど、もっともである。この目録索引はあくまでローマ字索引（欧文索引）なので、中国語の単語は発音を示すローマ字にして掲載しなければならないわけだ。

ただし一方では、同じ琵琶なのに「びわ」と「PIPA」で別扱いになっていることに、釈然としない思いは残る。日本の琵琶と中国の琵琶は別の楽器なのだろうか。もしも博物館の利用者が、博物館にどんな琵琶が所蔵されているかを調べようとした時、日本の琵琶も中国の琵琶も両方見つけることができるようにするには、どのような索引を作っておかなければならないのだろうか。また琵琶からさらに「〇〇琵琶」「××琵琶」というサブタイプが探し出せるようにするには、どうすればよいのだろうか。

博物館所蔵の日本の琵琶には「筑前琵琶」「楽琵琶」「平家琵琶」「笹琵琶」「薩摩琵琶」がある。しかしいずれも琵琶の仲間であることに違いはない。一方中国琵琶の所蔵品は三点ある。よく見ると大きさや形、フレットの位置や数が異なっているので、これも細かく言えば「〇〇琵琶」「××琵琶」というサブタイプに分けられるのかもしれないが、ここではいずれも「琵琶」で登録されている。

ついでながら中国の少数民族楽器においては、我々のよく知っている「琵琶」とは形も音色も奏法も異なる弦楽器で、名称に「琵琶」の文字を含むものがいくつもある。博物館所蔵の「倭倭琵琶」（倭倭族の琵琶）もその一つである。他にも例えば侗（トン）族の「侗族琵琶」も、普通の琵琶とはずいぶん異なる形をしている⁽³⁾。将来そうした楽器が博物館に収蔵された場合、これをどう扱うかという問題も生じる可能性はあるだろう。

もう一つ例を挙げよう。「埙」（埙）という楽器がある。いわゆる土笛の一種で、音楽史的には非常に重要な楽器である。古くは六千年以上前の古代遺跡からも出土しており、『説文解字』⁽⁴⁾にも「埙器なり。土を以て之^{これ}を為^{つく}る。六孔」とある。その後一貫して典

礼音楽には欠かせない楽器であった。現在も「堧」の名を持つ改良された楽器が用いられている。

さて音楽博物館には、日本・中国・韓国の「堧」が所蔵されている。ただし博物館所蔵品はいずれも異体字の「塤」で表記されており、「堧」の字は使われていない。そして目録索引には、

日本の「塤」は「けん = ken」

中国の「塤」は「xun」

韓国の「塤」は「hun」

として掲載されているのである。これは日中韓三国にまたがっているのに、琵琶よりも問題は大きい。日本語の音読みで「けん」、中国語で「xun」、韓国語で「hun」という読みをあらかじめ知っていないと、同じ種類の楽器が検索できないということになる。もちろん日本の「けん」と中国の「xun」と韓国の「hun」を「堧」という楽器のサブタイプと見なす、というのも一つの見識であろう。しかし製造国に関係なく「堧」という種類の楽器が探せるようにしておくシステムも、一方では必要なのである。

少々極端な例で考えてみよう。「ピアノ」について、個々の楽器の製造国によっていちいち呼び名を変える、ということを通常行うだろうか。つまり、

ベヒシュタインはドイツ製だからドイツ語で Klavier

ブロードウッドはイギリス製だから英語で Piano

でそれぞれ登録する、というやり方が必要なのだろうか。よほど特殊な場合を除けば、必要ないばかりか、却って煩雑であろう。逆に言うと、この方式だと「ピアノ」という見出しからいろんな国で作られたいろんな種類のピアノを探し出す、という使い方ができなくなってしまうのである。

こういう理屈をこねていると、ではヤマハやカワイのピアノは日本の楽器なのか、それともあくまで西洋楽器なのか、という面倒な問題にも行き着くことになる。実は博物館には、上海にあったモートリー商会製造（1930 年頃）のピアノが所蔵されているのだが、これはどうだろう。中国製のピアノなのだから、中国語で「GANGQIN（鋼琴）」と言わなければならない、ということになるのだろうか。いや、ピアノの製造地域を細かく論ずるのでない限り、とりあえず目録上はどの国のピアノも「ピアノ」で構わない、というのが常識的なところだと思うが、いかがだろう。

ではなぜ「琵琶」は「びわ」と「PIPA」に分けなければならないのか。「堧」は「けん」と「xun」と「hun」とを別物として扱わなければならないのか。東洋の楽器であっても、実はピアノと同じことが言えるのである。中国で作られた「琵琶」は「PIPA」だと言うならば、中国で作られたピアノは「GANGQIN」でなければならないではないか。やはり「琵琶」は「琵琶」、「堧」は「堧」で検索できなければ困るのである。

3、地図帳の例

さて、くれぐれも誤解なきように申し上げておかなければならぬ。私はここで博物館の作成された目録索引を批判するつもりなど、全くないのである。すでに述べたように、中

国音楽の研究をしている私はしばしば音楽博物館を利用させていただいている。その際に、自分自身が東洋楽器を検索しやすいように、東洋楽器のみに適応する自分用の索引を作っておこうと思った、というそれだけなのである。そしてせっかく作ったので、これを博物館の目録の補遺としてこの場を借りて公開して、博物館に日頃の恩返しをしようということなのである。

ご注意いただきたい。そもそもこの音楽博物館目録索引は欧文ローマ字索引なのだ。西洋楽器と東洋楽器の両方が所蔵されている博物館でローマ字索引を作れば、誰がやっても不可避免的にこうになってしまう。これは漢字と欧文との成り立ちの違いから来る本質的な問題なのである。ならば、東洋楽器の検索のためには、どのような工夫をすればよいのだろうか。早い話が、漢字表記専用の索引を別にもう一つ作っておけばよいのだ。僭越ながらこれは、我々中国学研究者の出番であろう。

ここで参考になるのが、地図帳の索引である。皆さん、学校の社会科の教科書や地図帳の中国地名が、カタカナ現地音表記で統一されつつあることをご存じだろうか。地図帳の中国地名は「スーチョワン」「チョンチン」「コワンチョウ」「コイリン」「チントーチェン」などのカタカナ現地音で埋め尽くされている。そしてその多くが語学的に誤りであること、また同じ地名でも本によってカタカナの書き方が違うことなど、問題の根は深い。さらにその現地音主義への異常なこだわりが、「万里の長城」を「ワンリーの長城」、「大運河」を「ター運河」、「淮河」を「ホワイ川」、「黒龍江」を「ヘイロン川」と書く、などと言う奇妙な交ぜ書き現象をも生み出している。こんなもので社会科の勉強をさせられる子供たちがかわいそうだ。そして近年では入試問題、公務員の就職試験問題などにも、このカタカナ地名が広がり始めた。人によって書き方が違うという、そんな曖昧なもので試験を行ってもいいのだろうか？

特に問題となるのは、地図帳の索引である。何と、このカタカナ現地音で地図帳の地名索引が作られているのである。つまり、「コワンチョウ」だの「コイリン」だのというカタカナ言葉をあらかじめ知っていないと索引が引けないという、まことに不条理かつ情けない状態になっているのだ。実際問題こんな索引では役に立たない。一体何を考えているのか…⁽⁵⁾。

では学校教材以外に、市販されている分厚い本格的な世界地図の索引はどうなっているのだろうか。もちろん本によってまちまちなのだが、優れた地図帳ほど索引を何種類も作っている、ということは注目に値する。世界各国の地名を検索するために、日本語での標準的な読み方による索引、欧文の綴りによる索引、日本の難読地名用の読み方索引、日中韓の地名用の漢字索引など、何種類もの索引が巻末に備わっている、という大変親切な地図帳が存在する。これなら読みが分からない漢字の地名であっても、それが日中韓いずれの地名であっても、あるいは欧文の文献に出てくるローマナイズされた中国地名であっても、索引のどれかを使えば必ず検索できるというわけなのだ。そしてこの世界地図の索引の方式は、東洋と西洋の楽器が両方所蔵されている博物館の索引にも応用が可能である。つまり欧文索引に加えて漢字索引も作っておいて、いろいろな形で検索できるようにしておく、ということなのだ。

4、漢字索引の作成

所蔵楽器の漢字索引、と言ってももちろんいくつかの方式が考えられる。見出し語を音読みで五十音順に配列するか、見出し語の漢字を部首別配列にするか、または総画順に配列するか、などなど。もちろん複数の方式の索引が用意されているにこしたことはないが、それは将来の課題として、ここでは思い切って割り切った方式を採用してみたい。つまりその読みに関係なく、漢字から検索できるようにする方法である。

その場合基本になるのは、漢字の日本語音、つまり「音読み」である。現地の発音によっていちいち区別しては、すでに述べたように同じ種類の楽器を検索できなくなる。あくまで検索のための道具として、統一した基準を用いなければならない。そのために一番便利なのはやはり「音読み」である。もちろん総画数でも部首でも構わないのだが、楽器名の索引の場合、読み方も部首も分からない難しい漢字はそれほどたくさん出てこない。我々が楽器を探す時に一番気軽なのは、やはり音読みであろう。それによって同じ漢字が同じ場所に配列されていれば、日本語の分からない中国の研究者でも、漢字を目で見て探すことができる、という副次的メリットもあるわけである。

もちろん音読み配列の索引では、実際の楽器名は一旦無視することになる。「神鼓＝しんこ⁽⁶⁾」と「神楽笛＝かぐらぶえ」を例に採ってみよう。これが本来の楽器名称（音も訓も混在）による索引なら「神鼓」は「し」の項目、「神楽笛」は「か」の項目と、ばらばらに置かれることになる。一方漢字の音読み配列であれば、「しんこ」「かぐらぶえ」という読みはひとまず置いておいて、

神鼓＝しん こ

神楽笛＝しん らく てき⁽⁷⁾

の音読みで配列しておくのである。そうすると同じ漢字が同じ場所に並ぶことになる。「かぐらぶえ」という読みは、博物館目録の欧文索引に載っているのだから、この索引で触れていなくても大きな問題はなかろう。同様に「拍子木」についても

拍子木＝ひょう し ぎ

ではなく、

拍子木＝はく し ぼく

で配列することになる。

しかしそうは言っても、どうしても「ひょう し ぎ」で引きたくなってしまうのは自然なことだ。「拍」を「ひょう」と読むのは、「はく」という音読みの慣用音なので、音訓で言うならば音読みに属する。ならば、「はく し」も「ひょう し」も両方入れておけばよい。強いてどちらかに統一する必要もなかろう。とにかくいろんな方法で楽器が探せるように、できるだけ親切に、というのが理想である。そしてたまたまなのだが、「拍」の場所には中国の「拍板」という楽器も並ぶことになる。「拍」の字がつく打楽器を、日中で比べることもできるわけだ。もちろん先ほどの「神楽笛」についても、「かぐらぶえ」と「しんらくてき」の両方の読みで登録しておけばよい。一つの楽器は索引の一箇所にしか登録してはならない、などという理由はどこにもないのだ。

5、凡例と補足

さて、以上述べてきたことに基づいて、博物館の所蔵楽器の漢字索引を作ってみることにしよう。まず説明を兼ねて凡例を作成し、さらに索引のデータを取る際に気づいた細かい事項を補足することとする。以下煩を避けて『大阪音楽大学付属楽器博物館 目録』の索引を「博物館索引」、拙稿で作成する漢字配列索引を「漢字索引」と呼ぶ。

(1) 凡例

- ・本索引は『大阪音楽大学付属楽器博物館 目録』（大阪音楽大学 1998 年 3 月 20 日）の索引（INDEX）を補足するための漢字索引である。

- ・同目録に収録されている楽器の内、漢字で表記されるもののみを選び、それを漢字表記のまま見出し語とした。

- ・本来の楽器名の読み方（音訓、中国語音、韓国語音）は問わず、原則として楽器表記の漢字の日本語音（音読み）に従って、これを五十音順に配列した。ただし必要に応じて訓読みの見出し語も立てている。

例えば冒頭の「あ」の項目。

見出し語	地域	ページ数	備考
鴉笛→カラス笛	[日]	55	
唢仔	[中]	36	
赤子笛	[日]	56	

博物館目録の表記は「カラス笛」だが、これを一旦「鴉笛」の漢字表記に直し、さらにその音読み「あ てき」で配列する。また「烏笛」の表記も可能なので、「う てき」の見出しでも配列する。「唢仔」は中国の楽器であるが、その漢字表記の音読み「あい し」で配列する。「あ」の項目の「赤子笛」は「あか ご ぶえ」の訓読みであるが、別に「せき し てき」の音読みでも配列している。

- ・漢字の字体は原則として日本の常用漢字に従い、常用漢字以外の文字については通常漢字辞典で基本字形とされる字体に従った。特に現代中国語では「簡体字」と呼ばれる略字体が広く使われているが、これを含めて日中韓の字体の差異は問わず、一律に日本の常用漢字体を用いている。

- ・見出し語について、博物館目録の仮名表記を漢字表記に直して掲載したものについては、「→」を以て博物館目録の原表記を示した。

例：按摩笛→アンマ笛

また、表記や読み特に注記が必要だと思われるものは、（ ）に入れて示した。

例：鼓（ちぢん）

・漢字表記の楽器の中には、漢語以外の楽器名の音訳（漢字転写、^{かしや}仮借、^{あてじ}すなわち宛字）であるものが含まれているが、これも原語の発音や転写された漢字音を問わず、日本語の音読みで配列している。例えば「熱瓦普」は西域に起源を持つウイグル族の楽器で、本来の楽器名称「ルバープ」の音訳である。本索引では「ルバープ」の読みは採らず、あくまで漢字から検索できるように「熱瓦普」の音読み「ねつ が ふ」で配列している。また「火不思」はトルコ語の「qobuz」という楽器の音訳名なのだそうだが、これも漢字検索のため「か ふ し」の音読みで配列してある。他の音訳名についてもこれに準ずる。

・日本の楽器で本来訓読みで呼ばれるものについても、一律音読みに従って配列した。ただし検索の便を考えて、訓読みも合わせて収録したものもある。例えば「竹法螺」は「たけ ほ ら」でも「ちく ほう ら」でも検索できるよう、どちらも収録している。「一節切」も同様に「ひとよぎり」と「いち せつ せつ」で収録している。

特に問題となるのは歌舞伎の擬音に用いる一連の「歌舞伎下座楽器」である。例えば「馬の嘶笛」は、音読みの原則に従えば「ば せい てき」となる。その場合平仮名の「の」をどうするかも問題となるし、それにそもそもこの楽器を「ば せい てき」で検索する利用者がいるとも思えないわけだが、しかし一方では「馬」に関係した楽器はないか、という検索に応えるためには、「ま」あるいは「ば」という音読みから「馬」が出てくるようにしておくことも無意味ではあるまい。そこで本索引では「ま の せい てき」「ば の せい てき」「うまのいななきぶえ」の三つの読みで見出し語を立てることとした。他の歌舞伎下座楽器についてもこれに準ずる。

・日本の国字には必ずしも音読みはないので、その場合は便宜上音符の音読みで代用した。例えば「笹琵琶＝ささびわ」の「笹」は国字なので、音符の「世」の音を用いて「せ び わ」でも収録している。

（２）補足

以下、漢字索引の作成に際して、博物館索引中に気づいた点を書き記しておく。

・Aの項目 博物館索引では「唢仔」のローマ字が「AIZAI」となっているが、正しくは「AIZI」。音読みは「あい し」。なお博物館目録本文と索引では、中国語のローマ字表記に声調符号（ā á ǎ à）のついたものとつかないものがあるが、日本で発行された日本語の目録については、声調符号はつけずにローマ字だけで構わないと私は考えている。

・Bの項目 博物館索引では「BAWU」の漢字が「把鳥」となっているが、正しくは「巴鳥」。音読みは「は う」

・Cの項目 「啫喱」は、韓国の楽器「チャバラ」の音訳語。これも漢字から検索できるよう、「と はい ら」の音読みで配列しておく。

・Cの項目 博物館索引には「箎」とあり、目録本文22ページも「箎」となっているが、この字は「箎」が基本字形だとされている。ただ字体を見れば推測できるだろうし、音も同じだから、漢字索引では「箎」で採録しておいた。

・Cの項目 「鼓＝ちぢん」について。奄美大島の楽器で、「ちぢん」は「つづみ」の方言音だから、広い意味で訓読みだと考えるべきである。漢字索引ではあくまで検索の便のために、「鼓＝こ」として配列すると同時に、「ちぢん」でも検索可能なように訓読みとして見出し語に加えた。

・Gの項目 「根卡」の「卡」の字は、博物館目録では上と下とを重ねたような字（峠という字の右側）になっているが、上と下は「卡」のように接しているのが正しい字体である。音読みは「こん か」で配列した。

・Gの項目 博物館索引では「GUCH'IN（古琴）」とあるが、現在の中国語ローマ字表記では「GUQIN」と綴る。「GUCH'IN」は現在用いられていない綴り方である。

・Gの項目 博物館索引には「GUNGU（群鼓）」とあるが、中国語の正しいローマ字表記は「QUNGU」。博物館索引では「Q」の項目に移さなければならない。

・Hの項目 歌舞伎下座楽器の「ホトトギス笛」を漢字検索に収録するにはどうすればよいか。「ホトトギス」の漢字表記はご存じのとおり何種類もの書き方がある。それをすべて見出し語として採用するのも現実的にはあまり意味がない。日本人なら「ホトトギス」の読みで探すことができる。そこで中国でも用いられる表記「杜鵑」「子規」「杜宇」を見出し語として採用しておいた。「不如帰」の表記は中国では使われないので採用していない。

・Hの項目 「葫芦笙」「葫芦簫」について。「芦」は異体字で、基本字体は「蘆」。漢字索引ではいずれも「葫蘆笙」「葫蘆簫」とした。

・H、K、Xの項目 「埴」について。すでに触れたように「埴」は「埴」の異体字だから、楽器名としては「埴」の漢字表記も必要である。本漢字索引の趣旨は、どちらが適切かを定めることではなく、検索の便のためにはできるだけ両方とも収録することにある。そのため、「埴 → 埴」と記して、どちらからでも検索できるようにした。

・Kの項目 「鑿」の音読みは「ろう」なのだが、仏具としては「きん」と読むようなので、「ろう」と「きん」の双方で配列した。

・Kの項目 「胡弓」について。中国では「胡弓」という言い方をあまり用いない。博物館所蔵品でも「胡弓」は日本のものである。もちろん日本の胡弓は中国のものとはかなり

形状が違うのだが、一方では、一般の日本人が中国の同様の楽器を「胡弓」と呼び慣わしているのも事実である。そこでやはり

胡弓 → 板胡、京胡、牛角胡、三胡、双胴京胡、四胡、唢胡、椰胡も参照として、同様の擦弦楽器を検索できるようにしておいた。また沖縄では「くーちょー」と呼ぶが、これは漢字の方言音なので、同様に「胡弓」から検索できるようにしておいた。

・ Lの項目 博物館索引では「喇叭」の「叭」の字が「呖」に見えるが、「口へん」の右は「入」ではなく「八」が正しい。

・ Oの項目 博物館索引では「敵」の字の「父（ぼくによ）」と「吾」とが左右逆になっている。

・ Pの項目 博物館索引では「鉄磬」になっているが、正しくは「鉄磬」。また「鉄」という字の韓国語音は「PANG」ではなく「CHEOL」だと思われる。

・ Rの項目 「龍神鈴」と「竜笛」。「龍」と「竜」には特に使い分けがあるわけではないので、どちらかに統一しておけばよいであろう。ここでは「龍笛 → 竜笛」としておいた。

・ Sの項目 「SGRA-SNYAN」はチベットの楽器なのでもちろんこのままでよいのだが、「大札木聶」という音訳語が添えられている以上、「だい さつ もく じょう」という音読みで漢字索引にも掲載しておく。ただし「大札木聶」は「大きな札木聶」を意味し、他に「中～」 「小～」も存在するので、「札木聶」からも引けるようにしておく。

・ Sの項目 「哨呐」という楽器は我々も日常中国語読みで「スオナー」と読み慣わしているが、漢字索引においてはあくまで音読みの「しょう とつ」で配列する。また沖縄では「ツオナ」と呼ぶが、これは漢字の方言音。やはり音読みで引けるように「しょう とつ」の見出しに置いた。さらに博物館には「大哨呐」「小哨呐」も所蔵されているので、これも「哨呐 → 大哨呐・小哨呐も参照」として検索可能にしておく。

・ Uの項目 「唢胡」のローマ字が「UONHU」となっているが、正しくは「WENGHU」。音読みは「おう こ」。

・ Xの項目 博物館索引は「响蓋」となっているが、「響蓋」とすべきである。「响」は「響」の中国語略字体。なお「蓋」は博物館目録本文145ページでは正しく「盞」になっている。さらにローマ字も「XIANZHAN」ではなく「XIANGZHAN」が正しい。ちなみに「盞」は「さかずき、おちょこ」の意味で、「響盞」で音の鳴るさかずきを意味する。

・ Yの項目 「洋琴」と「揚琴」は同じ楽器で、特に「洋」と「揚」に使い分けがあるわ

けでもないので、「洋琴・揚琴」を特に区別しない形とした。

・Yの項目 「圓月琴」は、常用字体を使うという原則から「円月琴」で掲載した。

・目録本文 1 2 1 ページ 「両面鼓」。これは「地域・国名＝不明」で「現在調査中」の楽器である。もちろん索引には採用しないという考え方もできるが、博物館索引には「Double Headed Drum」で配列されているし、これを漢字索引にも掲載しておけば、後にどなたかが調査なさる時に何かの役に立つかもしれない。そこで「りょう めん こ」で配列しておく。

・Dの項目に「大三弦」とあるが、博物館所蔵の「三弦」の名前を持つ楽器は他に、「中三弦」「小三弦」「特小三弦」「龍頭大三弦」がある。考えるに、実際の三弦の演奏者が自分の担当する楽器が「〇〇三弦」であるとか「△△三弦」であるということを、常に意識しているとは限らない。また博物館の索引を「三弦」で調べようとする人がいるかもしれない。そこで、博物館には単なる「三弦」という所蔵品はないのだけれども、

三弦 → 龍頭大三弦・大三弦・中三弦・小三弦・特小三弦を見よ
と注記しておくとう便利であろう。これは同様に

琴 → 小琴・中琴・大琴

哨呐 → 大哨呐・小哨呐

箏篋 → 小箏篋

金 → 小金・大金

といった楽器にも言えることである。特に「ひちりき＝箏篋」は「箏篋」とも書き、さらに博物館には「大箏篋」「郷箏篋」「細箏篋」「唐箏篋」も所蔵されている。そこで「箏篋・箏篋」からそれぞれの箏篋を検索できるように工夫しておいた。

ただこれは、ほどほどのところでよいのではないかと思う。なぜならこの拙稿はCD-ROM収録のPDF形式で公開されるからである。紙に印刷された索引であればそうした工夫を細かくしておく必要があるが、PDFの場合はコンピュータ上で文字検索ができる。そうすると「三弦」や「箏篋」が語頭にあろうと語中にあろうと、簡単に検索ができてしまうわけで、これぞ電子テキストの利点であろう。紀要をCD-ROM化された音楽博物館のご英断に拍手を送りたい。

以上のようにして作成した音楽博物館所蔵品の漢字索引を拙論末に掲げておく。日本の「びわ」も中国の「PIPA」も「琵琶」から検索できるように、という私個人のメモを少し整理しただけの漢字索引なので、不備な点も多々残っていようし、また実際の利用価値がどれだけあるものかはなはだ不安なところである。しかし、たとえ実際に役に立つことが全くなかったとしても、漢字表記による配列・検索、という筋道だけは通せたと思う。もちろん、万一博物館の利用者の方にいささかでもお役に立つことがあれば、それは望外の幸せである。私自身これを西洋楽器と東洋楽器の楽器名の取り扱い方に関するテストケースとして、今後もいろいろな角度から考察を続けたいと思っている。

日頃からいろいろなご教示をいただき、またこのたび拙稿掲載の場を与えて下さった音

楽博物館の本岡浩子館長、塩津洋子先生、並びに博物館の関係者の皆様に心からお礼を申し上げます次第である。

注

- (1) 拙著『^{がく}楽は^{らく}楽なり 中国音楽論集』、『楽は楽なりⅡ 中国音楽論集 古楽の復元』（いずれも共著、好文出版 2005 年、2007 年）を参照されたい。
- (2) 拙論「西洋から見た中国音楽、中国から見た西洋音楽 ―書籍分類の角度から―」（『日本音楽学会中部支部通信』第 63 号 2008 年 2 月 26 日）を参照されたい。
- (3) 中国の少数民族トン族の「トン族琵琶」は、大琵琶・中琵琶・小琵琶の三種類があつて、いずれもいわゆる「琵琶」とは形状も奏法も異なる。しかし現地の呼び名が「琵琶」である以上、目録では「琵琶」と表示しなければならない。なおトン族琵琶については薛羅軍『侗族の音楽が語る文化の静態と動態』（大学教育出版 2005 年）を参照。
- (4) 後漢の許慎撰『説文解字』。永元十二年（100 年）に成立。部首の概念を最初に用いた字典で、漢字学の經典。
- (5) 地図帳の中国地名のカタカナ現地音化をめぐる様々な問題については、次の拙稿を参照されたい。
「地図帳の怪 ―中国地名のカタカナ表記の功罪」中京大学文『文化科学研究』14 - 2（2003 年）
『「ター運河」とは、俺のことかと『大運河』言い… トンデモ化する社会科教材のカタカナ現地音表記』『と学会誌 17 号』（2006 年）
『オタク的中国学入門』楽工社（2007 年）第 2 章「中国地名・カタカナ表記の怪」
- (6) 中国の楽器なので、カタカナ現地音では「シェンクー」となるところなのだろうが、すでに触れたようにカタカナ現地音はとにかく混乱の元である。ここでは、中国の楽器はすべて日本語の音読みで、という原則をつらぬくことにする。
- (7) 「神楽」という言葉は「カムクラ（神座）」あるいは「カンラク」から来たという説が有力なので、神楽の音読みは「しん がく」ではなく「しん らく」で採る。

あ

鴉笛 → カラス笛 [日] 5 5
噯仔 [中] 3 6
赤子笛 [日] 5 6
当り鉦 [日] 1 3 2
編竹 [日] 1 3 1
雨団扇 → 雨うちわ [日] 1 5 6
菖蒲箏 → あやめ箏 [日] 7 0
按摩笛 → アンマ笛 [日] 5 5

い

一絃琴 [日] 7 3
一節切 [日] 1 2
石笛 [日] 2 9, 3 0

う

雨団扇 → 雨うちわ [日] 1 5 6
烏笛 → カラス笛 [日] 5 5
鶯笛 → ウグイス笛 [日] 5 5
謡拍子盤 [日] 1 4 0
団扇太鼓 [日] 1 1 0
馬の嘶笛 → 馬のいななき笛 [日] 5 5

え

駅鈴 [日] 1 4 0
鳶笛 → トンビ笛 [日] 5 6
円月琴 (圓月琴) [中] 9 1

お

噯胡 [中] 6 2
鶯笛 → ウグイス笛 [日] 5 5
大鼓 [日] 1 1 1
大箏 [日] 3 0

か

河鹿笛 → カジカ笛 [日] 5 6
牙箏 [韓] 6 1
火不思 [中] 8 8
伽倻琴 [韓] 6 1 → 散調伽倻琴も参照
河鹿笛 → カジカ笛 [日] 5 6
海笛 [台] 2 3

鰐口 [日] 1 2 9
郭公笛 → カッコウ笛 [日] 5 5
楽箏 [日] 7 8, 1 0 5
楽太鼓 [日] 1 1 2, 1 2 6
楽琵琶 [日] 7 8, 8 4, 1 0 6
神楽鈴 [日] 1 3 3
神楽笛 [日] 1 2
風の音 [日] 1 5 7
鞆鼓 [日] 1 1 1, 1 1 2, 1 1 9, 1 2 6
雷車 [日] 1 5 6
烏 (鴉) 笛 → カラス笛 [日] 5 5
管子 [中] 3 4
喚鐘 [日] 1 3 2
牛角胡 [中] 9 2

き

敌 [韓] 1 4 2
京胡 [中] 6 2, 6 3
響盞 [中] 1 4 5 → 「响」は中国語の略字体。
郷響簾 [韓] 1, 1 4
金 → 大金・小金を見よ
笊 → 大笊・中笊・小笊を見よ
鑿 [日] 1 3 4

く

狗叫 [中] 1 4 5
箜篌 → 小箜篌を見よ
孔雀琴 [中] 9 2
群鼓 [中] 1 0 9

け

磬 [日韓] 1 2 9, 1 3 4, 1 4 0
奚琴 [韓] 6 1, 8 4
京胡 [中] 6 2, 6 3
鷄笛 → ニワトリ笛 [日] 5 6
鷄婁鼓 [日] 1 2 6
𪚩笛 → モズ笛 [日] 5 6
月琴 [日中] 6 3, 7 4, 8 5 → 八方月琴・円月琴も参照
埙 → 埙を見よ
埙 (埙) [日中韓] 2 2, 2 5, 2 7, 5 2
玄琴 [韓] 6 1

こ

鼓 (ちぢん) [日] 1 1 0

胡弓〔日〕 6 1, 7 4, 8 6 → P.86 は沖縄の「くうちょう」。

また板胡、京胡、牛角胡、三胡、双胴京胡、四胡、唢胡、榔胡も参照

古琴〔中〕 6 2, 6 3

呼子笛〔日〕 5 6

胡西他爾〔中〕 8 3

古箏〔中〕 8 4

小鳥笛〔日〕 5 6

葫蘆笙〔中〕 4 0

葫蘆簫〔中〕 4 0

孔雀琴〔中〕 9 2

笏拍子〔日〕 1 3 8

狛笛〔日〕 1 2

根卡〔中〕 8 7

さ

座鼓〔韓〕 1 0 9

細箏〔韓〕 1

才鑼〔中〕 1 4 1

笙琵琶〔日〕 9 7

薩摩琵琶〔日〕 7 4, 8 0

札木翫 → 大札木翫を見よ

三弦 → 龍頭大三弦・大三弦・中三弦・小三弦・特小三弦を見よ

三絃琴〔日〕 7 3

三胡〔中〕 9 2

三線〔日〕 1 0 5

三ノ鼓〔日〕 1 2 5

三板〔日〕 1 3 4

三味線〔日〕 6 8, 6 9, 7 0, 7 1, 8 8, 1 0 0, 1 0 8

→ 津軽三味線も参照

散調伽倻琴〔韓〕 1 0 2

し

子規笛 → ホトトギス笛〔日〕 5 5

四胡〔中〕 6 3

四ツ竹〔日〕 1 3 4

四宝〔中〕 1 4 5

瑟〔韓〕 7 8

篠笛〔日〕 1 4

締太鼓〔日〕 1 1 1, 1 2 1

錫杖〔日〕 1 5 1

尺八〔日〕 1 2, 1 3, 2 1, 3 3, 4 1

笏拍子〔日〕 1 3 8

手鑼〔中〕 1 4 1

十七弦〔日〕 7 0

十面雲鑼 [中] 1 4 5
祝 [日] 1 4 2
鐘 [韓] 1 2 9
笙 [中] 2, 1 5
笙 [日] 1 2, 5 0
簫 [韓] 2 2
小金 [韓] 1 2 9
小笏 [韓] 2 2
小笙篳 [韓] 7 8
小鼓 [日] 1 1 1, 1 1 2
小三弦 [中] 6 2, 8 7, 9 2, 9 3
小哨呐 [中] 2 8
小鳥笛 [日] 5 6
小鉞 [中] 1 4 2
杖鼓 [韓] 1 0 9, 1 1 4
哨呐 [日中] 3 4, 3 7, 5 1 → 大哨呐・小哨呐も参照
鉦鼓 [日] 1 3 4, 1 5 6
篠笛 [日] 1 4
菖蒲箏 → あやめ箏 [日] 7 0
秦琴 [中] 6 3
津軽三味線 [日] 1 0 5
神鼓 [中] 1 2 0
神楽笛 [日] 1 2
神楽鈴 [日] 1 3 3

す

水小鳥笛 [日] 5 5
鈴 [日] 1 3 3

せ

笙琵琶 [日] 9 7
赤子笛 [日] 5 6
石笛 [日] 2 9, 3 0
千鳥笛 [日] 5 7

そ

箏 [日] 7 1, 7 2, 7 3, 8 4
双胴京胡 [中] 6 2
双盤 [日] 1 3 2

た

太平簫 [韓] 1, 1 3
大金 [韓] 1 2 9
大笏 [韓] 1, 1 3, 2, 6

大鼓 [日] 1 1 1
大杢木鼙 [中] 8 6
大三弦 [中] 6 1
大正琴 [日] 1 0 3
大哨呐 [中] 2 3, 2 8
大箏箏 [日] 3 0
大碰鈴 [中] 1 4 2
大鑼 [中] 1 4 1
竹法螺 → 竹ぼら [日] 5 7
達卜 [中] 1 1 7, 1 1 8, 1 2 1
短簫 [韓] 2, 1 4
団扇太鼓 [日] 1 1 0
短箏 [日] 7 0, 7 7
単皮鼓 [中] 1 2 0
弾布爾 [中] 8 2

ち

箏 [韓] 2 2
千鳥笛 [日] 5 7
筑前琵琶 [日] 7 4, 8 5
竹法螺 → 竹ぼら [日] 5 7
鼓 (ちぢん) [日] 1 1 0
千鳥笛 [日] 5 7
中琴 [韓] 1
中三弦 [中] 6 1
中碰鈴 [中] 1 4 2
虫笛 [日] 5 5
調子笛 [日] 1 1
蝸笛 → ひぐらし笛 [日] 5 6

つ

津軽三味線 [日] 1 0 5
墜子 [中] 8 4, 9 2

て

提琴 [中] 6 4
締太鼓 [日] 1 1 1, 1 2 1
箏 [韓] 2 2
笛子 [中] 4, 1 3, 2 8, 3 9, 4 4, 4 5
鉄磬 [韓] 1 3 0
天吹 [日] 3 2

と

杜宇笛 → ホトトギス笛 [日] 5 5

杜鵑笛 → ホトトギス笛 [日] 5 5
啫喱囉 → チャバラ [韓] 1 3 8
𪛗 [中] 1 0 9
𪛗鼓 [日] 1 2 6
銅鼓 [中] 1 4 4
洞簫 [中] 3, 2 6, 2 7, 3 6
洞簫 [韓] 1, 1 3
豆太鼓 [日] 1 1 0
唐笛 [韓] 1, 1 5
銅拍子 [日] 1 3 3
唐臂簫 [韓] 1, 5 2
銅鑼 [日] 1 4 0
当り鉦 [日] 1 3 2
銅鈴 [中] 1 4 6
特小三弦 [中] 9 2
鳶笛 → トンビ笛 [日] 5 6

に

二弦 [中] 8 7
二絃琴 [日] 7 3, 9 4
二胡 [中] 6 2, 7 5, 9 0, 9 1
鷄笛 → ニワトリ笛 [日] 5 6

ね

熱瓦普 [中] 8 2, 8 8

の

能管 [日] 2 2

は

巴烏 [中] 2 7, 3 6
馬の嘶笛 → 馬のいななき笛 [日] 5 5
拍 [韓] 1 2 9
拍子木 [日] 1 5 5
狛笛 [日] 1 2
拍板 [中] 1 4 1, 1 4 5
八角鼓 [中] 1 2 0
八方月琴 [中] 9 1
板胡 [中] 6 2

ひ

琵琶 [中] 6 3, 7 5, 8 8

→ 筑前琵琶・楽琵琶・平家琵琶・僕僕琵琶・笹琵琶・薩摩琵琶も参照

蛸笛 → ひぐらし笛 [日] 5 6

箏・箏 [日] 1 2, 5 0 → 大箏・郷箏・細箏・唐箏も参照

一節切 [日] 1 2

百舌笛 → モズ笛 [日] 5 6

拍子木 [日] 1 5 5

平鈞太鼓 [日] 1 1 1, 1 1 2

編笥 (編簞) → 編ささら [日] 1 3 1

ふ

風の音 [日] 1 5 7

へ

平家琵琶 [日] 7 3

平鈞太鼓 [日] 1 1 1, 1 1 2

扁鼓 [中] 1 2 0

編磬 [韓] 1 5 7

編鐘 [韓] 1 5 5

編笥 → 編ささら [日] 1 3 1

編竹 [日] 1 3 1

編簞 → 編ささら [日] 1 3 1

ほ

方響 [韓] 1 5 4

梆板 [中] 1 4 1

法螺貝 [日] 1 1

碰鈴 [中] → 大碰鈴、中碰鈴

杜鵑 (子規・杜宇) 笛 → ホトトギス笛 [日] 5 5

梵鐘 [日] 1 3 2

ま

馬の嘶笛 → 馬のいななき笛 [日] 5 5

豆太鼓 [日] 1 1 0

み

水小鳥笛 [日] 5 5

む

虫笛 [日] 5 5

も

木魚 [日] 1 3 2

木鉦 [日] 1 3 2

木托 [韓] 1 3 9

木鐸〔中〕 1 4 5
百舌笛 → モズ笛〔日〕 5 6
駄笛 → モズ笛〔日〕 5 6

や

椰胡〔中〕 6 4
簫〔韓〕 2 2

よ

洋琴〔韓〕 6 1 → 揚琴も参照
揚琴〔中〕 7 5, 9 4 → 洋琴も参照
腰鼓〔中〕 1 0 9
謡拍子盤〔日〕 1 4 0
四ツ竹〔日〕 1 3 4
呼子笛〔日〕 5 6

ら

拉琴 → 僂僂拉琴を見よ
喇叭〔中〕 4 3
雷車〔日〕 1 5 6

り

僂僂琵琶（リス琵琶）〔中〕 9 1
僂僂拉琴（リス拉琴）〔中〕 9 2
柳琴〔中〕 6 3
龍鼓〔韓〕 1 1 5
龍神鈴〔日〕 1 3 3
龍笛 → 竜笛〔日〕 1 2, 5 0
龍頭大三弦〔中〕 9 1
両面鼓〔地域不明〕 1 2 1

れ

鈴〔日〕 1 3 3

ろ

臚〔日〕 1 5 6
蘆笙〔中〕 2 1, 3 7, 3 8
鑿〔日〕 1 3 4

わ

和琴〔日〕 7 8
和太鼓〔日〕 1 1 2
鰐口〔日〕 1 2 9